

## シンポジウム報告

### 「バリアフリー図書の普及を願って—図書館と出版の協働」

平成17年7月20日(水)、国際子ども図書館3階ホールにて、シンポジウム「バリアフリー図書の普及を願って—図書館と出版の協働」を開催しました。このシンポジウムは、社団法人日本国際児童図書評議会(JBBY)との共催により7月から9月にかけて開催した「読書の楽しみをすべての子どもたちに」と題する催物の一環です。「世界のバリアフリー絵本展」(7月21日~24日開催)と「日本のバリアフリー図書の歩み」(7月21日~9月4日開催)の二つの展示会とともに、すべての子どもたちが読書の楽しみに巡りあうための課題とその解決法について、図書館と出版の協働のなかで考えるために、開催したものです。

図書館、出版、養護学校などの関係者103名の参加があり、村山隆雄国際子ども図書館長の挨拶に続き、第一部ではスウェーデンやさしく読める図書センター所長ブロール・トロンバック氏の基調講演、第二部では攪上久子氏(JBBY世界のバリアフリー絵本展実行委員長)をコーディネーターとして、4人の講師による日本のバリアフリー図書に関する報告とトロンバック氏を交えた質疑・討論が行われました。

第一部基調講演および第二部討論を、攪上久子氏にまとめていただきましたので、次に掲載いたします。

#### シンポジウム

#### 「バリアフリー図書の普及を願って—図書館と出版の協働」

平成17年7月20日 国際子ども図書館3階ホール

#### 第一部 基調講演「やさしく読める図書の出版—スウェーデンの経験から」

講師 ブロール・トロンバック (Bror Tronbacke)

#### 第二部 討論

コーディネーター かくあげ 攪上久子

#### 【報告】

- ◆山内 薫「日本の障害のある子どもたちへの図書館サービスの歴史と展望」
- ◆脇谷邦子「大阪府立中央図書館の取組み—図書館とわんぱく文庫のいい関係」
- ◆鴻池 守「バリアフリー図書の出版を手がけた経験から」
- ◆高倉嗣昌「障がいのある子どものための本作りと普及」

## ■基調講演・ディスカッション報告者紹介■

### ブロール・トロンバック (Bror Ingemar Tronbacke)

ウプサラ大学院にて文学修士・理学修士を取得、ストックホルム大学にて法律学、文化地理学を修める。スウェーデン政府商務省、法務省、教育文化省等に勤務。現在、やさしく読める図書センター (Centrum för lättläst: The Centre for Easy-to-Read) 所長。やさしく読める図書分野での開発と提供を主な業務とし、1984年よりやさしく読める図書関連の発行に従事し、異なったメディアでのやさしく読める図書の活用、及びこの概念を発展させようと務めてきた。また、国際図書館連盟 (IFLA) 障害者サービス分科会常任委員として、「やさしく読める図書に関するガイドライン (Guidelines for easy-to-read materials)」(1997年) 作成の中心的役割を果たし、やさしく読める図書を国際的にも普及させてきた。

### 山内 薫 (やまうち かおる)

1969年から墨田区立図書館に勤務し、現在は緑図書館に勤務。日本図書館協会障害者サービス委員会委員。著書に『拡大写本の作り方』(東京ルリユール 1987年) 等、共著に『障害者サービス』(日本図書館協会 1996年) 等多数。

### 脇谷邦子 (わきや くにこ)

1967年から大阪府立図書館に勤務し、現在は中央図書館に勤務。論文に「決意を示した大阪府子ども読書活動推進計画」(「図書館雑誌」97(6))、著述に『最新図書館用語大辞典』(柏書房 2004年) 児童サービス関連項目等多数。

### 鴻池 守 (こうのいけ まもる)

偕成社編集部長として乳幼児から小学生向きの絵本、障害者への理解を広げ、優しさをはぐくむ絵本、小学生向き国語辞典・漢字辞典、小学・中学生向き自然科学・社会科学啓発書などの編集に携わる。現在はフリーランス編集者兼編集企画プロダクション牧童社主宰。

### 高倉嗣昌 (たかくら つぐまさ)

北海道大学医療技術短期大学部助教授を経て、1994年から北海学園大学経済学部教授。1994年から財団法人ふきのとう文庫理事、2004年から理事長。

### 攪上久子 (かくあげ ひさこ)

国公立の盲・養護学校で様々な障害のある子どもの教育療育に携わる。現在昭島市、立川市等の母子保健事業の心理相談員。臨床発達心理士。2001年から2005年まで日本国際児童図書評議会理事。

### 寺尾三郎 (てらお さぶろう) <通訳>

スウェーデン在住。新聞社印刷工場に勤務のかたわら、ウプサラ市公認通訳・ガイドを務める。翻訳に LL ブック『リーサのたのしい一日』、『山頂に向かって』(愛育社 2002年)。

## シンポジウム報告「バリアフリー図書の普及を願って」

### 第一部 基調講演

#### 「やさしく読める図書の出版

#### ースウェーデンの経験から」

ブロール・トロンバッケ

(通訳) 寺尾 三郎

\*トロンバッケ氏はパワーポイント画像や、やさしく読める図書の实物を提示しながらお話してくださいました。



私はやさしく読める図書センター（以下 LL センター）（注1）のブロール・トロンバッケです。スウェーデンから来ました。今回で来日は3回目になりますが、国立国会図書館から招聘していただいたことに感謝しております。

世の中には「やさしく読める」ことを必要とする人たちが沢山います。障害がある方たちばかりでなく、高齢者の中にも「やさしく読める」テキスト

を必要とする方がいます。そういう人たちに対して私たちはどういことができるのでしょうか。スウェーデンをはじめ、他の国にも「やさしく読める」本を出している国がありますが、これから、「やさしく読める」ことについて、「やさしく読める」とはどういうことなのか、なぜ「やさしく読める」ことが必要なのか、どんな人たちが「やさしく読める」ことを必要としているのか、「やさしく読める」テキストを作るとはいったいどういうことなのか等についてお話したいと思います。また、「やさしく読める」ニュースのことや「朗読代理人制度」のこと、さらにそこから生まれているネットワークについてもお話したいと思います。

#### ■ 「やさしく読める」とは

「やさしく読める」とはどういうことかと言いますと、やさしく読めるようにするために内容・言語・絵・レイアウトなどに工夫をすることです。大事なことはこの四つを組み合わせることで、あるいはそういう工夫をしてほかの媒体（メディア）に変換する方法です。では、一体なぜ「やさしく読める」ことが必要なのでしょうか。まず、最初に言えることは、障害の有無にかかわらず誰もがデモクラシーの権利を持っているということです。そして身近な社会に参加する権利を有し

ているということです。「やさしく読める」情報を受けることによって、社会に近づき、参加していくことができます。そうした「生活のクオリティ」ということが大事です。全ての人たちが読めるということは大事なことです。というのも、本を読むということは、様々な人たちの考え方を知ることにもなるからです。本を読むことによって、社会での討論にも加わることができます。そしてまた、自分自身で読めるということは、自信を持つことにもつながります。

### ■「正確に読めない」人たち

世界の人の読み書きの力について概観してみましよう。「正確に読めない」人たちの割合は20～25%といわれていますが、これはスウェーデンに限らず他の国、例えばイギリス、アメリカの人たちにも言えます。またフランス、ドイツ、ポーランドといった国々でも調査いたしましたが、ほとんどの国が、20～25%の割合で「正確に読めない」人たちがいることがわかりました。その「正確に読めない」という基準は、中学卒業相当のレベルに達していないものとして調査をいたしました。それは、本に限らず日常のニュースを読めないということにもなります。読むことはできて、時には大事な情報を逃してしまうこともある、という人たちに対しては、普通のテキストよりもよりやさしいテキストが必要です。10～15%の人たちが、そういう「やさしく読める」本、あるいは活字を必要としています。

### ■「やさしく読める」ことを必要としている人たち

大きく分けて二つのグループがあります。一つは障害のある人たちのグループです。例えば、知的障害者、ディスレクシア（難読症ともいわれる学習障害の一種）、学習障害を伴う注意欠陥多動性障害、自閉症、先天性聴覚障害、認知障害などの人たちです。どういう障害かということに関わらず「やさしく読める」テキストを必要とする子どもたちもいます。こういう人たちがおよそ7～8%います。

もう一つの大きなグループとして、使われている言語への理解力や読解力の乏しい人たちがいます。それは、移民して聞かない人たち、あるいは、教育を十分に受けなかったり受けられなかったりという理由で、読み書きができない人たちです。学校へ行っている子どもたちの中にも、同様の理由で読めない子どもたちがいます。こういう人たちの割合は6～7%です。

### ■「やさしく読める」テキストを作るとは

「やさしく読める」テキストには古い歴史があります。「やさしく読める」テキストを作るにあたっては、LLセンターのスタッフだけではなく、研究者あるいはそれに関わる人たちの協力もあります。批評しあいながら、しっかり調査をして作ることが大事です。

私たちはどのように作るかというガイドラインを持っています。まず具体的に記

述することが大事です。そして論理的であること。つまりその物語を時間の流れに沿って把握できること、さらに、直接的かつシンプルであることが必要です。また、登場人物を少なくするというのも考慮します。象徴的な言いまわしは避けます。

大事なことは、簡潔に、短く意味を伝えることです。例えば、一つのできごとだけを伝えるようにしたり、難しい言葉は避けるようにします。複雑なことは、具体的かつ論理的に記述します。

そして公に出版する前に、試験的に調査することも大事です。著者、読者、出版者で、話し合いを持ちます。知的障害者も読める本を作ることに対して、そういう話し合いの場を持つということは、とても大事なことだと思っています。というのはその知的障害者のためだけに作るのではなくて、他の障害者も同じように「やさしく読める」テキストを読むことができるようになるからです。そして、テキスト、写真、絵だけではなく、そこにピクトグラム（注2）を導入することによって、一層わかりやすくすることができます。

## ■レイアウト

テキストは、そのレイアウトも重要です。大事なことは、わかりやすく魅力的なものであることです。そして、間隔をとった大きめの文字であること、長い文を使わないこと、見やすい字体であることも大事です。見やすいということは、はっきりと読めるということです。英字の場合、文字サイズとして12~14ポイントの大きさが適当だと私たちは判断しています。そしてまた、十分なコントラストをとることも大事です。例えば、背景と活字のコントラストです。

その例として、この本をご覧ください。この本は片方のページに写真を載せ、もう一方のページにテキストを載せています。字も普通より大きくなっており、間隔もとってあります。文はなるべく短めにしています。そして単純な写真を載せるようにしています。

## ■絵の大切さ

絵は大事な要素です。絵やイラストは、文を読むにあたって理解を深めるために役立ちます。具体的な絵や写真を見せることによって内容が把握しやすくなります。大事なことは、絵が文と一致していることです。絵と文が一致していなかったり、絵が小さすぎると、読者を迷わすこととなります。

## ■「やさしく読める」レベル

「やさしく読める」本は一つだけのレベルではなく、やさしさのレベルが分かれています。色々なグループの人たちが、三つにレベル分けされた本を、読めるようになっていきます。私たちはその三つのレベルで本を作るのが普通です。その三つのレベルについてはまた後で触れます。

## ■あらゆるメディアへの対応

「やさしく読める」ということは、本だけに限りません。他の色々なメディアに対しても必要です。「やさしく読める」新聞、あるいは雑誌も必要です。官庁から来る通知も、やさしく読みやすいものに変換し、情報を伝えることが必要です。また、テレビ、ラジオ、ビデオの番組に関しても、「やさしく読める」ことが大事です。現在では、マルチメディア DAISY 図書（注3）もずいぶん普及してきていて、日本もそうだという感じを受けましたが、これも必要です。マルチメディア DAISY 図書は、視覚障害者に対して作られているものが標準になっています。ウェブサイト、CD-ROM、DVD 及び他のデジタルメディアに対しても、「やさしく読める」ことが必要です。先程申し上げましたピクトグラムも大事な材料の一つです。

## ■国際的ルールとガイドライン

国際的ルールとガイドラインについて触れます。LL センターの役割に関して申しますと、国連の「障害をもつ人びとの機会均等化に関する基準規則」は私たちの業務を支援するものです。国連の規則では障害のある人たちも文化的活動に参加できるべきであり、そのために「やさしく読める」テキストを読む機会が必要であると謳われています。UNESCO 公共図書館宣言には、図書館がその手助けをするべきであり、障害のある人たちに限らず、使用されている言葉を理解することが困難な人たちに、特別な配慮が必要であると述べられています。「やさしく読むこと」に対する IFLA のガイドライン（注4）にも「やさしく読める」本が必要な人たちへの配慮が謳われています。図書館あるいは図書館で働く司書たちが、「やさしく読める」図書について知り、障害のある人たちに情報を伝える役割を担うことが大事だと考えます。私は各国の会議に出席していますけれども、他の各国でも図書館がイニシアチブを取って、「やさしく読める」図書に率先して取り組んでいます。

## ■スウェーデンにおける歩み

「やさしく読める」本が刊行されるまでに、スウェーデンでどのような経過があったかを、少し話したいと思います。スウェーデンに「やさしく読める」図書の機関ができたのは1968年です。1968年には「やさしく読める」図書（LL ブック）の作業が、教育に関する国家機関である学校庁の管理下で試験的にスタートしました。その当時は、ある特殊なグループが出版者との協力のもとに出版作業を担当しました。

1984年には公的な機関「音読新聞委員会」が、理解力のある障害者や他のグループで、「読むことが難しい」人たちにどうしたらニュースを伝達することができるか、という調査を始めました。視覚障害者だけでなく、その他の障害のある人たちに対する調査も含まれました。その時、試験的に作られたのが『8ページ』という新聞です。その試みは1年間ほど続けられ、その後、週刊となりました。

同時に国会決議により LL センターが作られました。新聞や「やさしく読める」図書の刊行など、業務内容に関する規則も決めました。「やさしく読める」図書刊行に際して1991年に、独自の出版社 LL 出版を発足させました。その時、私は国会からの委任を受けて、審議院で調査をしておりました。そして、LL センターに入ったわけです。

その後、1992年には「朗読代理人制度」という活動を試験的に始めました。障害のある人たちの中で、他の人から代わりに読んでもらうことを必要とする人たちのことを考えて、そういう活動をするようになったわけです。この制度では、「朗読代理人」が一緒に図書館に行って、読みたい本を代読することも行っています。また、会社、官庁の依頼を受けて、「やさしく読める」図書についての広報パンフレット類も作っています。どのようにして「やさしく読める」テキストを作るかというノウハウを教える研修も行っています。

つまり、①「やさしく読める」図書の出版、②『8 ページ』の刊行、③ノウハウ、④「朗読代理人」という四つの部門に分かれて LL センターは活動しています。市場調査も行っております。現在のところ、27人ほどが私の所で働いています。日本円にして年間4億2千万円が予算に充てられています。そしてその半分は国庫補助です。国庫補助無しには、本の売り上げや他の営利だけで LL センターの運営を賄うのは困難です。

## ■ LL センターの役割と原則

LL センターの役割は、読解力に困難のある人々や、読むことに慣れていない読者に情報を与え、文献がやさしく楽に利用できるように支援することです。

その原則となるものはデモクラシーです。そしてアクセシビリティ、つまり利用のしやすさ、社会参加への援助です。これらが私たちの原則となっています。

## ■ スウェーデンルールとガイドライン

スウェーデンにおいては、スウェーデン独自のルールとガイドラインがあります。例えば、官庁からの情報に対してあらゆる人々が障害があろうとなかろうと一情報を受ける権利を持っているわけです。官庁としても、ただ情報を与えるだけでなく、全ての人たちに情報を理解させる責任を負っているわけです。スウェーデンには、障害のある人たちの権利を守る法律があります。障害者に対しての、サポートやサービスの享受を権利として保障するということです。国家として、障害のある人たちに他の人たちと同じサービス、身体的なことに限らず精神的な面でも同じサービスの享受を保障しています。

## ■ なぜ特別な機関が必要なのか

それでは、なぜ LL センターのような特別な機関が必要なのでしょう。それ

はまず、色々な能力を持っている人たちを集めることができるからです。LLセンターでは、出版社からの依頼で出版するだけでなく、出版する前に特別な研究者等との話し合いのもとに、調査も行います。そういう場合には特殊な能力や知識が必要です。新聞あるいは本に限らず、あらゆるメディアに対して、専門家のもとで作ることがたやすくできるようにもなります。社会に対する情報に関しても、同じことが言えます。マーケティングの調査は、本を作ったり、あるいは「やさしく読める」本についての広報と同じように大事なことです。それがなぜ「やさしく読める」テキストが必要か、ということの基礎にもなります。そしてまた、一つの機関があることは、他の機関とのコンタクトがしやすくなります。国からの援助を受ける際も、一つの機関ということがプラスになっています。そしてさらに、他の機関と協力しやすいということも重要なことです。

## ■ 「やさしく読める」本



私たちは「やさしく読める」本に関して色々なタイプの本を作っています。例えば、小説や推理小説も作っています。あるいは歴史の本、詩の本も作っています。その本は私たち独自で作る場合もありますし、かつて出版された本を作り直すこともあります。そして、本を作る場合、先程三つのレベルがあると言いましたが、それによって分けるわけです。

毎年約30冊の「やさしく読める」本を出版しております。現在のところ「やさしく読める」テキストで作った本は、約

600冊あります。子どもたちを対象にした本も作っております。そういう本を出版する場合、初版で1,000～5,000冊作ります。版を最も重ねた本の中には、12,000～13,000冊にのぼった本もありました。多く出版した本は、よく知られた推理小説や有名作家の本です。他には『日常の法律』という本も多く刷りました。その後、この『日常の法律』という本は、色々なグループが利用できることがわかりました。また障害のあるなしに関わらず、子どもたちにも利用されることがあります。知的障害者を対象にした本も作っておりますが、部数はそれほど多くはありません。そういう本の場合は、だいたい1,000～1,500冊くらいです。たとえ出版数が少なくとも、そういう本も、あるグループにとっては必要な本だと私たちは考えています。

「やさしく読める本」の三つのレベルについて、画像で示しながら説明いたします。

### レベル1の本 『正しい方法』

これはレベル1の本の一例です。レベル1がもっとも「やさしく読める」本のレベルです。タイトルが示しているように、どうしたらいいかということ、絵を多く使って表した本です。「やさしく読める」レベル1の本には、CD-ROM やピクトグラムを使っています。

### レベル2の本 『リーサの楽しい一日』(邦訳あり)

レベル1、あるいはレベル2に所属する本です。この本は、いわゆる乗り物サービスを必要とする人についての物語です。一日の生活が書いてあります。リーサの一日の出来事です。これは写真を多くして、テキストを少なめにしています。そしてまたピクトグラムをつけています。

### レベル2の本 『デザイン：昔と現在』

これはデザインについて書かれた本です。この本は色々なグループに購入されました。例えば、高校あるいは大学で、デザインのコースを選んでいる生徒たちです。「やさしく読める」本を必要としない人たちも、こういう本を購入することがあるということで、例に挙げました。

### レベル2の本 『世界の子どものシリーズ』

私たちが最近作っているものに、『世界の子どものシリーズ』というレベル2の本があります。こういう本をシリーズとして出版しております。これもまた写真を多くし、テキストを少なめにしております。

### レベル2の本 『世界の子どものシリーズ：アフリカの子ども』

これも同じシリーズです。アフリカの子どもの本です。このようにテキストと写真が片方ずつのページに分かれ、テキストも短くなっております。

### レベル3の本 『ロミオとジュリエット』

古典を私たちが作り直した本の一つの例です。このような古典は、購入層が幅広いです。

### レベル3の新聞 「やさしく読める」新聞『8ページ』

「やさしく読める」新聞を紹介します。この新聞は週1回刊行しています。日常読まれるニュースをもとに、やさしく書いてあります。写真を多く載せてあり、テキストも簡単に書かれていますが、内容は普通の新聞と同じです。(クロスワードの記事を紹介しながら) これはスウェーデンではやっているのですけれども、いわゆる日本でいうクロスワードも載せています。また子ども用のクロスワードもたいへん人気があります。このテーブルの横に展示しておきますので、見たい人は後でご覧になって下さい。この新聞はインターネットでも見られるようになっていました。

## ■「やさしく読める」本の購入者

私たちが作った本を、いったいどういう人が買ってくれるのかということについて述べたいと思います。一番多く購入してくれるのは、施設や研究所、学校、そし

て図書館です。例えば、学校図書館だけで、だいたい私たちが出版する60%のシェアを占めています。あと介護機関、病院や高齢者住宅も、結構多く購入されています。そしてまた多くはないですけども、個人の方も購入されています。

## ■電子メディア

最後に電子メディアについてちょっと触れます。インターネットでのウェブサイト、DAISY 方式による音声本、ウェブでの音読紙を作っております。簡単に操作できて、中身をやさしく伝えられるように努めております。スウェーデンではスウェーデン録音図書点字図書館 (The Swedish Library of Talking Books and Braille) という機関が主にマルチメディア DAISY 図書を作っています。

最後まで聞いてくださってどうもありがとうございました。

(注1) HP アドレスは <http://www.llstiftelsen.se/>

※ 「やさしく読める図書」とは「lättläst」、英語では「Easy-to-Read Books」。「LLブック」とも言う。

(注2) 文字や音声言語の理解の難しい知的障害・肢体不自由・自閉症の子どもたちのコミュニケーションの手段として開発された視覚シンボル。絵文字。

(注3) DAISY (Digital Accessible Information System) は、障害者も共に使えるマルチメディアの国際標準規格の名称。マルチメディア DAISY 図書は音声とテキスト、画像をシンクロ (同期) させてパソコンで表示するもの。

(注4) Guidelines for easy-to-read materials / compiled and edited by Bror I. Tronbacke under the auspices of the IFLA Section of Libraries Serving Disadvantaged Persons IFLA Headquarters. c 1997 <UE11-A53>

